

## 中國における「詩跡」の存在とその概念

——近年の研究史を踏まえて——

植木久行

### 一、序に代えて

すぐれた詩歌のなかに詠み重ねられ、愛誦されてきた實在の固有名詞「地名」は、まことに不思議な機能をもつ。それは、單なる地理的空間を明示するだけでなく、長い文藝史のなかで當地に託され、刻みつけられてきた歴史的記憶と傳統的詩情（イメージや情感など）を、瞬時に喚び起こす靈力を備えている。

荒俣宏『歌傳枕説』<sup>[1]</sup>の序章には、きわめて卑近な「演歌の御當地ソング」を取りあげて、この現象を興味深く指摘する。

津軽<sup>つがる</sup>、というだけでは印象が明瞭でないが、津輕海峽冬景色、となれば北國の驛のわびしさが眼前に浮かんでくる。函館、というよりも、「函館の女<sup>ひと</sup>、とすることで北海の波しぶきまでが見えてくる。具體的な地名と、歌のイメージとが、強い相互作用を生じて、御當地<sup>ご当地</sup>の劇的な印象を固定させる。

と。この機能に歴史性加わる、いいかえれば、古來、すぐれた詩歌のなかに詠みつがれ、廣く享受されてきた地名は、詩人たちの感性が詠み重ねた、ふくよかな美的イメージと詩的情感をたたえた詩語（歌語）と化している。歴史

的に變遷する表層と普遍的な固有の中核<sup>コア</sup>をあわせ持ちながら……。

およそ詩歌の世界では、どの國でも、時間と空間は、基本的な二つの發想軸を形成する、といつてもよいだろう。日本文學における季題（季語）と歌枕（名所）は、その典型である。古典和歌のなかに詠みつがれて純化し、獨特の連想作用（特定の景物や情趣）を帯びた歌語となった實在の地名「歌枕」（名所）は、周知のごとく、遅くとも平安時代以來の長い文藝史を持つている。近年、俳諧・俳句の分野でも、この歌枕と類似した新しい詩學用語「俳枕」（現實の見聞のうえに立つて、俳諧・俳句の眼で新たに發見したり、舊來の歌枕を捉え直したりして、詠みつがれるようになった名所。江戸前期の延寶八年（一六八〇）、俳人高野<sup>たかの</sup>野<sup>の</sup>幽<sup>ゆう</sup>山<sup>さん</sup>によって刊行された發句の國別名所集『誹<sup>はい</sup>枕<sup>まくら</sup>』にもとづく。尾形<sup>おがた</sup><sup>らふ</sup>氏<sup>ぢ</sup>などの提唱<sup>ていしょう</sup>）が、しだいに廣く認知され、『新撰 俳枕』全七卷（朝日新聞社、一九八七―九年）や、『大歳時記3 歌枕・俳枕』（集英社、一九八九年）などが編纂・刊行されて<sup>い</sup>いる。

「俳枕」の提唱にやや遅れて、中國古典詩の分野でも、この歌枕・俳枕と類似した概念をもつ詩學用語「詩跡」が、早稻田大學教授松浦友久氏とその門下、寺尾剛・松尾幸忠氏らによつて提唱され、少しずつ確實に用いられた。

「詩跡」の觀點から中國各地の多様な文藝風土を分析する論文も、徐々に増えてきた（詳しくは後述）。松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年一月）に収める第三章「名詩のふるさと（詩跡）」（筆者擔當）は、日中兩國における最初の総合的な「詩跡」辭典になっている。紙幅の関係から、當該書のなかで簡略化された項目を補足した論文に、「中國詩跡補考」（筆者、弘前大學人文學部「人文社會論叢（人文科學篇）」第一號、一九九九年三月）がある<sup>あ</sup>。

中國の舊社會にあつては、周知のごとく、古典詩は藝術のなかで最高の文藝様式として認識され、政治や文化を擔つた士大夫（讀書人）層の、最も基礎的な教養となつた。『詩經』以來生み出された風土性・歴史性豊かな詩歌の數々と、長い文藝史のなかで磨きぬかれた詩語の累積とが重なりあつて、中國各地に「詩跡」が誕生していった。詩跡の概念

については、本稿の後半部で近年の研究史を踏まえて詳述するが、ここでも簡略に觸れておきたい。

中國の「詩跡」とは、單なる地名ではなく、長いあいだ詠みつがれ、愛誦・流布されてきた古典詩のなかに出現して、ある特定の傳統的な詩情やイメージを豊かにたたえた、各地に實在する具體的な場所（いずれも固有名詞に屬し、我が國の歌枕・俳枕と同様に、宮殿・高樓・橋・亭・關所・祠廟・舊宅・寺院・墳墓などの人工物も含まれる）をいう。この詩跡は、いわばすぐれた詩人たちの詩心の傳統を、ふくよかにやどす聖地であり、當地獨特の地理的空間や自然景觀だけでなく、代々その土地に刻みつけられ、託されてきた豊かな詩情と長い風雅の傳統を強く喚びさます連想機能を持っている。

したがって詩跡の研究は、すぐれた文學作品が規定する、いわゆる文藝風土の研究に屬する、と評してもよい。單に風景が美しく、歴史に富むだけでは、詩跡と呼ぶことはできない。そうした名勝・古跡の基礎のうえに、さらに文藝的な歴史を内在させて、文學史上著名な固有名詞として定着・流布することが、重要不可缺の條件となる。しかもわが國の歌枕が、古くは歌ことば（歌語）を意味し、地名もその一種として理解されていたように、この詩跡もまた、それぞれ重層的に詠み重ねられ、形成されてきた、傳統的詩情と多様なイメージをたたえた詩語として確立していることが必要である。それは、作者と讀者の共通理解を支える重要な效用を持ち、わが國の季語や歌枕・俳枕と同様に、「作者の詩情に點火し、作品へと結晶させる起爆劑ないし核としての力を秘め」（尾形尙「俳枕考」<sup>6</sup>）ている。

この「詩跡」は、現在のところまだ新しい詩學用語であり、學會のなかで廣く認知されたとはいえない。このため、わが國の歌枕觀とその特色に對する研究成果を整理・活用して、中國の詩跡との異同を考察することは、重要な不可缺の作業となろう。これは今回、紙幅の關係上省略し、本稿では詩跡の存否をめぐる筆者の見解を記したあと、先行論文に見える「詩跡」の概念とその特質を整理して、將來より一層期待される詩跡論展開のための基礎作業とし

たい。

## 二、詩跡の存否をめぐる

「詩跡」が提唱される前夜ともいうべき時期に行われた、尾形仿・森本哲郎兩氏による對談「おくの細道・縦横」〔國文學―解釋と教材の研究〕一九八九年五月號、學燈社）のなかには、「中國に歌枕はあるか」という刮目なぐもくすべき條が見える。二人の發言は、當時における國文學者・評論家の、「詩跡」に對する認識のありようを具體的に示すものとして、きわめて興味深い。

前條「歲時記と歌枕」の終りには、

尾形（歌枕の）名前が詩歌の世界に引き寄せてくれる絲口になっているんですね。

森本 そうなんです。ヨーロッパやアメリカには名前だけで人を引き寄せるそんな「歌枕」はありませんね。

むしろ、畫家が描いたところ、たとえばゴッホが描いたプロヴァンス地方の「はね橋」であるとか、そういう名所があります。しかし、歌枕というのは、……やはり日本的な、その最たるものだと思いますね。

中國にもないんじゃないでしょうか、歌枕などというのは。

とあり、引き続きいて中國における「歌枕」の存否をめぐる兩氏の考えが、次のように披瀝されている。

尾形 そうですか。

森本 史跡はたくさんありますけれど、<sup>①</sup>ここは李白が歌った場所だ、などというのは……。

尾形 ただ、西湖を詠んだ詩には西施を詠み、後の詩人が西湖に來てもまた西施を詠むというふうには、ずっと詠

み繼いでいきますね。ああいうのはちょっと歌枕に似ているなと思いますが。

森本 でも、そこは宋の時代の都であつたという、史跡的イメージがやはり強いように思いますね。

尾形 ああ、そうですね。

森本 中國の場合はどちらかというと文學的というより歴史的で、ここは禹の廟であるとか、秦の始皇帝の陵であるとか、そういう史跡に立っている詩人が詩を詠むので、後世そこにまた詩人が来て詩を詠む。岳陽樓に②してもそうですが、そういうふうにして歴史がやがて歌に詠み繼がれていくということになるわけです。

ところが日本の場合には、「玉江」<sup>(なまえづ)</sup>なんて歴史的に何の意味もない。ですから、歴史と切り離されちゃつているような氣がするんですね。白河の關あたりはかなり歴史とも重なっていますが、また、「夏草や兵どもが夢の跡」と芭蕉が詠んだ平泉などの場合は、藤原三代という歴史が重なってますけれども、「末の松山波こえ(さ)じとは」<sup>(8)</sup>などというのは歴史と何の関係もない。そういう意味で、同じ「してき」でも、日本では「史的」じゃなくて、「詩的」のほうなんです③ね。

尾形 詩歌による地誌ですよ。私、中國にはやや歌枕的なものがあるんだと思つてはいたけれども、それはやっぱり日本人的な詩の読み取りなんですかね。

森本 そうだと思いません。そんなわけで「詩の旅」というのは、中國ではなかなかたどりにくい。張繼の「楓橋夜泊」、あの「月落ち烏啼いて——」という詩が日本人に親しまれて、日本人の觀光客は寒山寺をみたあと、必ず楓橋に立ちます。すると、中國の案内の人は不思議そうな顔をして、「こんなつまらない橋をどうして見たがるのか」ときくんです。しかし、これは④いつてみれば日本人にとつての歌枕なんです⑤ね。

尾形 そうですかね。楓橋では、やっぱり「楓橋夜泊」をテーマにしたというか、本歌にした詩が詠み繼がれて

るんじゃないですか、「月落ち烏啼きて」だけじゃなくて。

これに對して、森本氏は、「それはないわけじゃありませんが、代々詠み繼がれていったなどという形跡はありません」と一蹴し、「やはり中國の人は、そうした詩跡には大して關心がないとしか思えないですね」と結論づけている。「詩跡」の語が用いられている點も注目されてよい。

中國文明のなかで、二つの「し」、詩歌と歴史が重視されてきたのは、まぎれもない事實である。森本氏の發言は、當人の關心が強く作用してか、歴史の方面に重點を置きがちであり、その判斷も昨今の中國旅行に多くもとづいていようである。他方、尾形氏の推測は、中國古典詩の影響を視野に入れて研究してきた國文學者らしい、直觀の冴えを見せている。

ここで森本發言に含まれる、二三の基本的な誤解を指摘しておきたい。

①の傍線部「ここは李白の歌った場所だ、などというのは……（見あたらない）」は、大きな誤解である。寺尾剛「李白と『詩跡』——中國詩の歌枕<sup>⑩</sup>」によれば、李白の遺跡、あるいは彼の名とともに言及されている土地や文物は、南宋の地理書『方輿勝覽』や『輿地紀勝』のなかに多く収録され、のちの『大明一統志』では約一三〇條、『大清一統志』にも一二〇條ほど収めるといふ。たとえば、安徽省の桃花潭は、李白の「汪倫に贈る」詩によって、また同省の秋浦は、李白晩年の名作「秋浦の歌」の連作によって、一躍有名な詩跡となった例である。當地は、「歴史的に何の意味もない」（前掲の森本發言）にもかかわらず、著名な歌枕（詩跡）の一つになっている。

②の傍線部、岳陽樓の場合も、まず史跡として知られ、のちに詩人がそこに立ちよって詩を作り、歴史を詠み繼いでいった、と見なす考え方も、妥當ではない。かつての中國最大の湖、洞庭湖を俯瞰する登臨の名所「岳陽樓」は、その名稱自體、盛唐期以降に現れる。その前身と目される、古い時代の譙樓（物見やぐら）や城樓は、史跡としては

ほとんど無名に近い。岳陽樓の名を一躍有名にして文人墨客の心を引きつけたのは、まず杜甫の絶唱「岳陽樓に登る」詩であり、續いて北宋の范仲淹の「岳陽樓の記」であった。いかえれば岳陽樓は、杜甫の名詩と范仲淹の明文によって、天下に名高い第一級の詩跡（歌枕）になったのである。この場合、史跡というよりも名勝であったことが、岳陽樓を詩跡化する重要なモチーフとして作用している。杜詩の首聯「昔聞く 洞庭の水、今上る 岳陽樓」は、當該樓が「八百里の洞庭」を眼下に一望できる登臨の名所として、杜甫の心を長いあいだ引きつけてやまなかったことを、端的に表している。この點で、岳陽樓の事例は、秦の始皇帝陵の詩跡化とは全く異なるケースなのである。中國の詩跡は、大半が史跡をも含めた、いわゆる名勝古跡と重なりあっている。

③の傍線部、楓橋が「日本人にとって（のみ）の歌枕」であるとする發言もまた、大きな誤解である。この楓橋は、張繼の「楓橋夜泊」と杜牧の「吳中の馮秀才を懷ふ」という二首の名作によって詩跡化し、「南北の客の（當地を）經由するに、未だ此の橋に憩ひて題詠せざる者有らざるなり」（南宋の范成大「吳郡志」卷十七）と記されるほどの、第一級の詩跡であった。決して日本人だけを引きつける歌枕であったわけではない。

「楓橋夜泊」にもとづいた詩が、「代々詠み繼がれていったなどという形跡はありません」（④の傍線部）とする發言もまた、歴史的事實と大きく離れている。南宋以降、孫觀・陸游、明の高啓・文徵明、清の王士禛など、各時代の著名な詩人たちが、張繼詩を踏まえた詩を作っており、「夜半の鐘」を聞くまでは眠れなくなったほどである。

王勃の華麗な駢文と詩（「滕王閣の序」と「滕王閣」詩）によって一躍著名な詩跡となった、洪州（江西省南昌市）の滕王閣は、歴代、幾度となく修復・再建されてきた。一九八九年の再建は、その二十九回めにあたるとも傳える。このことは、盛唐の崔顥「黃鶴樓」詩と李白の「黃鶴樓にて孟浩然の 廣陵に之くを送る」「史郎中欽と黃鶴樓上に笛を吹くを聴く」詩などで名高い、武昌（湖北省武漢市）の黃鶴樓の場合でも、ほぼ同様である。しかもこの二樓は、前

述の岳陽樓とともに、歌枕（詩跡）化する段階で、すでにある有名な歴史的事件が発生していた「史跡」ではなく、むしろ名勝に屬する場所であった。たび重なる修復と再建の實態を知るならば、「中國の人は、そうした『詩跡』には大して關心がないとしか思えない」などは、全く發言できないだろう。むしろ逆に、長く愛誦されてきた不朽の名詩の魅力と、長いあいだ詠みつがれてきた文化遺産のもつ力とを、まざまざと實感せざるをえない。かつては観光事業推進による収入の増加を期待できたわけではない。

中國各地に多數散在する詩跡に對して、充大な保護を求めるのは無理であろう。前述の江南三大名樓の存在は、詩跡に對する中國人の熱い思いを端的に表す事例、と考えてよい。南宋の王象之『輿地紀勝』卷二六、隆興府の條には、滕王閣について、「唐より今に至るまで、名士の留題（詩文を題き留めること）、甚だ富めり」という。黃鶴樓の場合も、明代すでに三五〇首あまりの詩を収めた馮承榮ら纂輯『黃鶴樓集』三卷が刊行されている（現存）。こうした詩跡の復元や保護の方法は、必ずしも日本のそれと同じではない。しかし古典詩文を文明・文化の中核に位置づけてきた中國にあつては、長い文學の傳統に培われた詩跡、いわば歴代の詩人たちの詩魂がやどる風雅の聖地に對して、歴代おむね多大の關心を持ち、その存續と記録に大きな努力が拂われてきた、と考えるべきであろう。

最後に一つ、①の波線部、中國では「歌枕」的なものがないために、「詩の旅」というのは、中國ではなかなかたどりにくい」とする森本發言も、やや問題となろう。これは、日中兩國とも大きな山河や史跡はともかく、邊鄙な地方の小さな歌枕・詩跡は、一般に時代とともに大きく變貌し、時には不明となる。中國では、歴代、全國・地方の地理書類が多く編纂されており、調査の便宜を得やすいが、土地の廣大さは、日本とは比較にならない。それにもかかわらず、日中兩國とも、ささやかな歌枕・俳枕・詩跡が、各地に傳存している。むしろこのほうが不思議な現象であろう。



わが松尾芭蕉「おくの細道」仙臺の條に、「年比さだかならぬ名どころ」云々とあり、壺の碑の條には、より明確に、

むかしよりよみ置ける歌枕、多くかたり傳ふといへども、山崩れ、川流れて（川は流れを變え）、道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り、代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを（今ではその遺跡が確かでないものはかりなのであるが）、

云々と嘆息する。ちなみに、芭蕉と曾良が、所在の定かでない觀念的名所が、ひときわ多い陸奥の歌枕を詳しく訪ね歩くことができたのは、仙臺藩など當地の各藩が、文化政策の一環として取りくんた歌名所の整備が完了した後であった、という幸運にもとづいているらしい。要するに、日本でも歌枕を探訪する旅は、決して容易ではなかったのである。

### 三、中國の「詩跡」の概念をめぐって

近年、各地に散在する詩跡の形成と定着を研究する、文藝風土學的な論文が、徐々に増えてきた。ある土地が、どんな理由から詩人の心を捉えたのか、という詩跡形成の基礎條件を探りながら、詩跡を形成・確立した作品群の分析を通して、イメージや發想上の繼承關係を考察して、當該地に附與された獨特の詩的情感や美的イメージを解讀していく。詩跡が歴代、「作者の詩情に點火し、作品へと結晶させる起爆劑ないし核」（前引）の一つとして作用してきたことを考えるとき、風雅の傳統が宿る詩跡の研究は、古典詩歌の表現史や受容・流布史などの研究と重なりあう。そして詩跡が古典詩語と化した地名であることは、詩語研究の一分野としての重要性も備えている。

詩跡の定義や概念等に言及する主要な論文は、ほぼ次のごとくである。

松尾幸忠<sup>①</sup>「杜牧と黃州赤壁―その詩跡化に關する一考察」<sup>⑭</sup>

②「皮日休『館娃宮懷古』の『香徑』について」<sup>⑮</sup>

③「嚴子陵釣臺の詩跡化に關する一考察―謝靈運・李白・劉長卿」<sup>⑯</sup>

寺尾 剛<sup>④</sup>「李白における武漢の意義―『詩的古跡』の生成をめぐって」<sup>⑰</sup>

⑤「李白における宣城の意義―『詩的古跡』の定着をめぐって」<sup>⑱</sup>

⑥「李白と『詩跡』―中國詩の『歌枕』(前出)

松浦友久「『詩跡』と『歌枕』―イメージの喚起力」<sup>⑲</sup>  
など。<sup>⑳</sup>

まずこれらの諸論文に見える詩跡の定義を見てみよう。松尾論文<sup>③</sup>は、「文學作品(主に詩)を媒介にして著名になった場所(土地・建物・遺跡等)」とする。文學作品(主に詩)という言葉は、わが國の歌枕が「源氏物語」や「伊勢物語」「大和物語」などとも密接に關連していたことを想起させる。私見によれば、歴史書や地理書中の文學的表現は、小説・詩話・傳記などとともに、無視しえない影響力を持っている。

寺尾論文<sup>④</sup>も、ほぼ松尾説と同じく、「詩に歌われることによつて著名になった『土地』(建築物・モニュメント等を含む)」としながらも、<sup>③</sup>論文ではさらに詳しく、

詩によつて創造された『土地』に關わるイメージ・發想・テーマ・言語感覺等までが繼承されていく「名所」と述べて、詩跡の特性を明快に指摘する。

他方、松浦論文は、「特定のイメージを共有しつつ、明確な古典詩語として確立された具體的な地名」と定義する。

これは、歌枕が歌語と化した名所である點に着目した發言であろう。この點は、金澤規雄「歌枕への理解―歌びとに與うる書」<sup>(21)</sup>にも、こういう。

歌枕とは、地名が韻文の中に採り入れられ、詩語（歌語）となることである。その例は、中國では「詩經」などに早く見られ、日本でも記紀歌謠から「萬葉集」へと用例が多い。

ところで中國古典詩の世界は、その長く豊かな歴史、地域の廣大さ、作品数の累積、作者数の多さ、發想における傳統繼承性の強さ（典故の重視）などの諸性格を備えており、すでに見た岳陽樓や楓橋・寒山寺などの事例のように、中國にもわが歌枕・俳枕と共通する文學現象が充分認められる（大半が實際の見聞のうえに成り立つという點では、俳枕に  
より近い）。

ただ比較詩學的に言えば、中國文學史には、從來、「詩跡」（歌枕・俳枕）に相當する名稱・術語が、存在もしくは通行していなかった。これは、きわめて不可思議なことである。寺尾論文<sup>(22)</sup>も、こういう。「何故か、中國ではこの「歌枕」にあたる詩學用語が存在しない。しかし、詩という一つの言語藝術によつて生産され、また、それによつて生み出された独自のイメージさえも、その土地のイメージとして繼承されていく、という意味で、いわゆる「名勝古跡」という語と區別する術語の存在が望まれよう」と。つまり、「詩歌にもよく詠まれる地名という點では「名勝」【景勝】がやや近いが、詩歌を主體とした概念でないという點で、質的には遠」（松浦論文）いので、明確な術語（詩學用語）の存在が望まれ、現在ではほぼ「詩跡」の語に落ちついてきたのである。

中國における詩跡形成の基礎條件とは、いったい何であろうか。寺尾論文<sup>(A)</sup>は、

①ある具體的な空間・物件（土地）が存在すること、②その空間・物件に固定的な「名稱」（地名）「建築物名」（等）が存在すること、③詩に歌われること（著名な作品、著名な詩人の作品であることが望ましい）

の三點をあげ、③の行爲の反復を通して、詩跡は「生成」から「定着」へと移行する、と指摘する。これは、わが國の歌枕や俳枕が、たとえば吉野山・淀川・逢坂關おつかのせき・和歌浦わかかづら・廣澤池ひろさわのいけ・濱名橋はまなのはし・最上川もがた・象潟などのように、地名を冠した山や川・關・池・橋などが多いことも關連する現象である。漠然とした場所よりも、ある具體的な事物を前にしたほうが、イメージの集約と純化に便利であり、實際に訪れた場合、そこに自分が確かにいるのだと強く實感できるためでもある。

寺尾論文の三條件は、名勝古跡の存在と、それを詠みこんだ著名な文學作品（主に詩）の存在（松尾論文⑧）の二條件にまとめることもできよう。これは、實在の固有名詞たる土地（場所）と詩歌との緊密な結びつきを本質とする詩跡の概念から考えてみても、必須の條件といつてよい。

しかも地名を詠みこんだ單數もしくは複數の詩は、①發想のおもしろさ・奇拔さ、②記憶・暗誦のしやすさ、③口頭に上りやすい朗詠性（寺尾論文⑧）の特徴をもつことによつて、より容易に讀者の心を魅了し、時空を越えて長く愛誦され、かくして忘れたい詩跡として確立する。④の朗詠性の重要さは、松尾論文④にもすでに指摘されており、「詩型別に見た場合、五言よりも七言、律詩よりも絶句の方がより適している」ことになる。これは、暗誦の容易さ（⑨）とも直結する條件である。

もちろん、杜甫の「岳陽樓に登る」（五律）、李白の「金陵の鳳凰臺に登る」（七律）、崔顥「黃鶴樓」（七律）などのような、詩跡化に決定的な役割を果たした律詩もあるが、その大勢はゆるがない。これは、わが國の歌枕・俳枕を形成した和歌や發句が、定型かつ短詩である點とも似かよう現象である。ただ中國の場合、わが國とは異なつて、多様な詩型（齊言・雜言、今體・古體）が詩跡の形成に關與しており、長い詩の場合は、その中の名句（通常二句單位）を中心に愛誦・流布されることになる。

詩人が初めてある土地を詠もうとする創作のモチーフは、いったい何であろうか。これは、わが國の名所歌枕とほぼ同様に、歴史的・文學的・宗教的・政治的・經濟的・地理的な要因が、深くかわりあつていよう。寺尾論文①は、この點を細かく分類して、その對象が、①人目を引くランドマーク（陸標）的存在、②歴史的事件の發生した場所、③それにちなんだモニュメント（遺跡・建築物・墓陵・碑文等）が存在する（した）、④著名人ゆかりの地（生没地・任官地・假寓地等）、⑤風光明媚な景勝の地（あるいは地勢的にインパクトがある）、⑥歴史的事實でなくとも、土地にちなむ傳説・傳承等が存在する、という六點を指摘する。そしてこの「名勝古跡」に屬する要因のいずれか（時には複數）が、多かれ少なかれ、詩人の作品化するモチーフになつてゐる、と結論する。なお補足すれば、その③④などとみてもかわりあうが、かつての政治の中心地たる都城（長安・洛陽・鄴城・南京など）の存在と、宗教上の聖地（五臺山・天台山・廬山・嵩山など）や著名な寺觀（慈恩寺・白馬寺・寒山寺・靈隱寺など）、交通上の要所（函谷關・潼關・瓜洲・瀟橋・萬里橋・三峽など）などに對する視點も、重要かつ不可缺であろう。

松尾論文②の指摘も、寺尾論文の範圍を出ない。ただ松尾論文の、「第一に必要なことは、創作主體である文學者が、その場所を訪れること」という箇所は、いささか疑義が残る。というのは、邊境にある玉門關・陽關や王昭君墓（青塚）などの詩跡化は、ほとんど歴史書や小説・傳説・傳承にもとづく、空想の所産と考えられるからである。陽關を詩跡化した名作「元二の 安西に使ひするを送る」詩を作つた王維が、陽關を實際に見た確證はなく、そもそも實體験の有無は、詩跡形成の絶対條件とはならない。桂林を詩跡化した名句「江は青羅の帶を作し、山は碧玉の簪の如し」（送桂林嚴大夫）を作つた韓愈も、桂林に赴いた形跡はない。おそらく韓愈は、傳聞や地理書などの知識にもとづいて創作したのであろう。

ある土地を詩跡化した作品の創造性について、寺尾論文③は、

(1) 詩によって獨特のイメージが創作されている、(2) 歴史的故事を踏まえる場合でも、詩による故事の再構成・再認識（あるいは活性化）が行なわれ、しかも實景と故事とが融合し、新たな抒情・テーマ（懷古・言志・旅情等）が生成されている、(3) 土地を言語化・詩作品化（言語藝術の對象）する過程において、地名の含む一字一字の字義・形體・音韻に至るまで、詩人の關心の對象になっている。

と述べ、「後世、その地が詩と共に受け継がれる際、民衆・墨客等は、この(1)〜(3)や、あるいはその詩・詩人のエピソードに至るまでをリンケージしたかたちで、意識し繼承していく」と指摘する。これは、實際の詩跡研究を踏まえた發言として注目される。要するに詩跡とは、當地を詠みこんだ詩歌の創造的なイメージに美しく彩られた、中國の文學地誌と評することもできよう。それは、必ずしも現實の風景や實際の風土そのままではない。

他方、松尾論文◎は、詩跡形成の必要條件として繼承性をあげ、「或る土地ゆかりの作品が生まれた場合、それを繼承するものが出てきて、初めてその土地は詩跡として認識される」とする。この點は、寺尾論文①にも「生成」から「定着」への過程として述べられている（前引）。寒山寺と夜半の鐘、邛山と人生の無常、姑蘇臺と吳國の興亡、易水と荆軻、瀟湘と離怨・風景美、瀟橋と送別・折柳、銅雀臺と曹操・妓女（銅雀妓）、峨眉山と月などのように、當地を詠みこんだ作品群のなかに、イメージや發想・テーマ・語彙などの面で繼承關係の明瞭な場合も多いが、そうではないケースも散見する。これは、當地を詩跡化した作品のなかに、著名な絶唱があるかどうかともかわりあう。またわが國の名所歌が、多く實景を知らずに、机上で先行歌の情趣や表現にすがって作られたのとは異なり、大半が實體驗にねざした詩であったため、みずからの感動にもとづく自由な眼で對象の新しい眞實を發見して歌うことも充分可能であった。この點に關しては、平安後期の藤原清輔『和歌初學抄』中の「萬葉集所名」の終りの、「その所にのぞみてよむには、よしあしいはず。かしこの名をよむべし」という言葉が思い起こされてくる。従って繼承性は、

単に作品だけでなく、詩跡化した名作の愛唱の繼續性をも含めたものとして、ゆるやかに考えておくべきであろう。安徽省の詩跡「桃花潭」などは、李白の「汪倫に贈る」詩一首による忘れがたい詩跡であり、後世詠みつがれた形跡はほとんどないようである。

この繼承性に關して、松尾論文③は、二つの鍵——作品そのものに起因する場合（詩跡化した作品に觸發されて創作意欲をもつこと）と、對象物である場所の問題を指摘する。そして前者については、①朗詠性にすぐれる、②地名或いは故事などを詩中に歌い込み、詩のイメージを巧みに増幅させている、③詩人自體が非常にエピソードに富む性格を持ち、それが作品からも彷彿される、また後者については、地理的に往來の困難な場所では、繼承性がきわめて低くなる（柳州と柳宗元など）、と指摘する。詩人のエピソードの面では、平安中期の數寄者能因法師の逸話の多さを思い起こさせるが、他方では、邊境の陸奥が歌枕の寶庫になつた特異性を浮き彫りにする。

要するに詩跡とは、實在する具體的な地名を詩中（詩題を含む）に詠みこむことによつて誕生する。そして一般には複數の詩によつて重層的に、時にはただ一首の名詩によつて形成され、獨特のイメージや情緒・景物などを連想させる、傳統的詩情をたたえた古典詩語なのである。詩跡の本質は、土地と詩歌との緊密な一體感にある。ある固有の地名が、ある特定の詩歌との關わりにおいて認識・理解されるといふ「認識の型」の成立（松尾論文④參照）こそ、詩跡の本質として重要である。それは、いわば和歌・俳諧における本意（對象の最も本質的な詩的情感、詩歌のなかに刻みこまれてきた美意識の傳統）の確立にはかならない。従つて極端にいえば、當地を詠んだわずか一首の名作の長い愛唱を通して、充分詩跡が確立されるのである。舊社會における詩文集（別集・總集）や、名所の詩を収めた地理書（全國と地方の地志）の流布と愛讀狀況などを考えれば、當地の詩跡化に寄與した名作一首のもつ價值は、きわめて大きいように思われる。

中國の詩跡は、わが國の歌枕・俳枕と同様に、單なる地名ではなく、いわば中國の風土に刻みつけられ、託されてきた古典詩人たちの、鍊磨された詩心の傳統を深々とやどし、歷代詠み重ねられてきた詩歌の美的イメージに美しく彩られている。それは、時代を追って移ろいゆく眼前の實景を超えて存在しつづける、詩歌の別天地であった。元來、すぐれた詩歌の創造性に依據して確立し、詩心の傳統を深々とやどす聖なる空間「詩跡」は、それを詠んだ詩人たちへの親愛感と詩的表現への共感を内在させながら、變貌する現實の背後に、詩歌の美しい地誌を展開し續ける。詩跡の持つ風雅の傳統（詩的情感）が、その傳承地で實體験した自然の風土や風景の美と一致するとき、人々の感動はひとときわ高まり、逆の場合には深く失望・落膽することになる。詩跡や歌枕・俳枕の傳承地を探訪して起こる、こうした喜びと悲しみは、深く詩歌の傳統を愛する者へのみ許された、至福かつ殘酷な宿命なのであろうか。

## 註

- (1) 世界思想社、一九九八年。
- (2) 日本俳書大系・談林俳諧集所收。
- (3) 尾形仿『俳句の周邊』（富士見書房、一九九〇年）には、「俳枕―風土からの發想」と「俳枕考」を収める。後者は、「新撰 俳枕1」に初出。ちなみに、新しい俳諧の名所としての「俳枕」の使用は、すでに堀信夫「歌枕あるいは名所の句」〔俳文藝〕一號、一九七三年）などに見える。
- (4) 平井照敏『俳枕』二冊（河出書房新社、一九九一年、河出文庫）もある。
- (5) 拙著『唐詩の風景』（講談社學術文庫、一九九九年四月）も、詩跡の觀點を加えて執筆した。
- (6) 注(3)参照。
- (7) 福井縣の歌枕。『大歳時記3 歌枕・俳枕』一四〇頁参照。
- (8) 清原元輔の歌。注(7)書一九頁など参照。



(9) H・E・プルチョウ『旅する日本人―日本の中世紀行文学を探る』(武蔵野書院、一九八三年)は、「歌枕」の地と、その縁語の多くは、もともとならんかの宗教的・神話的・歴史的意義を持つていたに違いない」(二七頁)とし、筆者もほぼ同意見である。

(10) 『月刊 しにか』一九九五年六月號(大修館書店)所收。

(11) 本稿中の個々の詩跡の論證は、前掲の『漢詩の事典』第三章(筆者擔當)参照。

(12) 葉昌熾『寒山寺志』(江蘇古籍出版社、一九八六年)も参照。

(13) 當時の歌枕の比定には、牽強附會も多かったようである。金澤規雄「歌枕傳承の二重構造―「有耶無耶關」の運命」(『文藝研究』第一四五集、一九九八年)には、みちのくの歌枕がどのような傳承過程を経て存在しているのか、その基本的パターン(見取り圖)を描き、きわめて興味深い。金澤規雄『おくのほそ道』とその周邊』(法政大學出版局、一九六四年)も参照。

(14) 『中國詩文論叢』第八集、一九八九年。

(15) 注(14)書第十五集、一九九六年。

(16) 注(14)書第十六集、一九九七年。

(17) 注(14)書第十一集、一九九二年。

(18) 注(14)書第十三集、一九九四年。

(19) 松浦友久『萬葉集』という名の雙關語―日中詩學ノート』大修館書店、一九五五年所收。

(20) 拙稿「詩跡への誘い」(前掲の『漢詩の事典』所收)も参照。

(21) おうふう、一九九五年、七三頁。なお同書八二頁には、歌枕に對する二種の異なる規定(立場)――韻文に地名が詩語として使用されること、レトリック的機能の重視、を指摘する。

(22) その理由の一つは、松浦論文参照。